現代日本語規則動詞の形態論的分類と接辞 *-i* の役割[1]

伊藤勝啓*

(昭和52年4月30日受理)

A Morphological Classification of the Modern Japanese Regular Verbs and the Role of the Suffix *-i*

by Katsuhiro ITOH

This paper aims to show that the dichotomy of the modern Japanese regular verbs into [A] vowel-ending-stem verbs and [B] consonant-ending-stem verbs facilitates the morphological description of them. The present writer tries to illustrate that, in the process of classification, the suffix *-i*, which seems to have a structural meaning in the [B]-group verbs while it has, of course, a conjunctive status, has its role in a) the infinitive form, in b) the nominalized form (compound nouns), and in c) the phonological change which occurs regularly in the process of preteritalization with the suffix *-ta*. If this hypothesis is correct, it will serve not only to simplify the morphological description of the regular verbs but also to teach, from the linguistic point of view, the Japanese language for both the foreigners and the Japanese.

I

「日本語の動詞語幹に閉音節が存在した……」[2]，と推測してその可能性を例証しようとしたのは大野晋 (1964) であり，「被覆形たる形状言に独立化のｉが接尾して連用形を成立せしめる」[3] としたのは川端善明 (1968) である。これらの所見は現代日本語に関するものではないが，動詞の形態論的分類とその根拠となるｉ接辞の役割を見定めることと，規則活用の記述を形式化するのに資するものである。

本論文において，まず動詞を [A] 母音幹動詞，[B] 子音幹動詞の二つのタイプに分けて例示し，第二にその根拠をいわゆる連用形形成接辞の *-i* にあることを示すが，但しこの *-i* は連用形という活用のみならず，動詞の語幹（子音幹動詞の）から複合名詞を作る際にも現われるの

* 北見工業大学一般教育等

(1) 新らしい研究状況を示すものとして，川端善明，(用言)，岩波講座日本語，文法 I，pp. 169–211，所収を参照。註に記された文献も参照。この論述中特に，「形と種類」を扱った項を参照。

(2) 大野　晋 (1964), p. 49.

(3) 川端善明 (1968), p. 14, 同 (1976), p. 209 も参照。

で，原田信一 (1977) が行ったように[4]，不定形なるものを想定して，その接辞と考えることにする。これによって [A] 類と [B] 類の関係が明確となろう。第三に過去形成接辞の *-ta* (あるいは接続助詞 *-te*) をとった時の [B] 類の音韻上の変化を例示し，その際の語幹末子音と *-i* 接辞の結合 + *-ta* に一定の規則性があることを示すであろう。

II

第一に，[A] 類の動詞を挙げるが，音韻特徴を鮮明にするため表記にはローマ字を使う。

(1) ki-*ru* (着る), mi-*ru* (見る)
(2) some-*ru* (染める), hame-*ru* (嵌める)
(3) uke-*ru* (受ける), nage-*ru* (投げる)

[A] 類動詞は，語幹末母音が ___e/i であっても等しく，*-ru* をもって終止形とする。更にこれは共通の活用を示すので以下 (**表–1**) に挙げる[5]。

表—1

1.	否定形	*-nai*
2.	受身形	*-rareru*
3.	使役形	*-saseru*
4.	将然形	*-yoo*
5.	丁寧形	*-masu*
6.	不定形	-ø
7.	終止形	*-ru*
8.	仮定形	*-reba*

表—2

1.	否定形	*-anai*
2.	受身形	*-areru*
3.	使役形	*-aseru*
4.	将然形	*-oo*
5.	丁寧形	*-imasu*
6.	不定形	*-i*
7.	終止形	*-u*
8.	仮定形	*-eba*

次に [B] 類の動詞を以下に挙げる。

(1) sas-*u* (刺す), kas-u (貸す)
(2) kak-*u* (書く), kik-*u* (聞く)
(2′) kog-*u* (漕ぐ), tog-*u* (磨ぐ)
(3a) mats-*u* (待つ), tats-*u* (立つ)
(3b) kir-*u* (切る), ter-*u* (照る)
(3c) kaw-u (買う), waraw-u (笑う)
(3′a) yom-u (読む), hasam-u (挟む)
(3′b) shin-u (死ぬ)
(3′c) tob-u (飛ぶ), manab-*u* (学ぶ)

(4) 原田信一 (1977), p. 15 を参照。筆者は原田論文に先き立って出版された川本茂雄 (1976), pp. 100–115. の「変形の諸相」に啓発されるところが多かった。

(5) 原田信一，前掲論文，p. 15 を参照。原田はここで命令形をあげていない。命令形は，[A] 類では -yo/ro/re, [B] 類では -e となり，深層構造の抽象的形を指定することが困難だからであろう。最近では終止形の最終音節にアクセントを置いて命令の意を伝達する傾向が見られる。

この分類の根拠については後述するが，[B] 類は皆共に同じ活用を示す。(**表–2** を参照)。

III

次に [A] 類，[B] 類の分類根拠について考察をすすめよう。上述のように両類の不定形に目をとめるとき，[A] __ø [B] __*i* を得るが，__ø/*i* の対立が明示されている。

[A] の (1) の ki-ru と [B] の (3b) の kir-u が如何にして生じるかということを，複合名詞化することによって明らかにしよう。[A], [B] 共に不定形が規準となるが，この不定形が複合名詞化に際して規定語としても，また基礎語としても機能することがわかる。

[A] 類	(1)	ki-ru⟶**ki**-mono (着物),	hare-**gi** (晴着)
	(2)	some-ru⟶**some**-nuki (染抜),	te-**zome** (手染)
	(3)	uke-ru⟶**uke**-tsuke (受付),	yūbin-**uke** (郵便受け)
[B] 類	(1)	sas-u⟶**sash*i***-mi (刺身),	ika-**sash*i*** (いか刺)
	(2)	kak-u⟶**kak*i***-mono (書き物),	suji-**gak*i*** (筋書)
	(2′)	kog-u⟶**kog*i***-te (漕ぎ手),	hito-**kog*i*** (ひと漕ぎ)
	(3a)	mats-u⟶**mach*i***-ai (待合),	jikan-**mach*i*** (時間待ち)
	(3b)	kir-u⟶**kir*i***-kabu (切株),	yubi-**kir*i*** (指切り)
	(3c)	kaw-u⟶**kaw*i***-dashi (買出し),	hito-**kaw*i*** (人買い)
	(3′a)	yom-u⟶**yom*i***-kata (読み方),	naname-**yom*i*** (斜め読み)
	(3′b)	shin-u⟶**shin*i***-mizu (死水),	uchi-**jin*i*** (討ち死)
	(3′c)	tob-u⟶**tob*i***-bako (飛箱),	kaeru-**tob*i*** (蛙飛び)

[A] 類の __ø(–) に比して，[B] 類には必ず __*i*(–) が現われる。これによって [A] の (1) のキルと [B] の (3b) のキルが外見上ルと終止するように見えながら，前者がル，後者がウ音である事が理解されよう。更にこの二語の場合，アクセントも考慮に入れる必要があるかも知れない。いずれにせよ，複合名詞化によって子音幹動詞の語幹に接尾する *-i* 音は，単なる接続母音というだけではなくて，構造的意味を担った接辞であるといえよう[6]。ここにわれわれは不定形なるものを予想して作業を進めてきた理由がある。この *-i* 音は更に過去形成接辞 *-ta* と語幹との接続の際に現われるので検討してみよう。

IV

動詞語幹に過去形成接辞の *-ta* が接続するとき，[A] 類，[B] において以下のようにまとめることが可能である。[B] 類の場合，子音＋子音となって日本語においては，このような結合が阻止され何らかの母音が挿入されるが，その際複合名詞化や不定形における形態的意味を担った *-i* 音が採用される。

(6) i 接辞の活躍については，大野 (1964), p. 45 を参照。又フィンランド語において名詞，形容詞の中で二音節語中，語幹が -e で終る語を単数主格にする時に働く接辞 -i の存在も興味深い。尾崎義 (1971[9]) の p. 47 を参照。

[A] 類 ____ø+*ta* となる。

[B] 類

1. ____s ⟶ ____ʃ+*i*+*ta* Ex. sas-i-*ta*→[saʃita]
2. ____k ⟶ ____ø+*i*+*ta* Ex. kak-i-*ta*→[kaita]
3. ____g ⟶ ____ø+*i*+*da* Ex. kog-i-*ta*→[koida]
4. ____ts/r/w ⟶ ____?+ø+*ta*(7) Ex. mats-i-*ta*→[ma ? ta]
5. ____m/n/b ⟶ ____N+ø+*da* Ex. tob-i-*ta*→[toNda]

これらのうち2.類と3.類とは調音点が同一で，無声/有声の対立があるが，語幹末子音の消失(あるいは融合)に際して，特にそれが有声子音gの場合，その情報は消失することなく過去形成接辞の *-ta* に伝達され，*-ta* が有声化されて *-da* となると考えられる。この考えが妥当性をもつものとすれば，4.類と5.類との関係にも転用する可能性がでてくる。

以上の考察から，現代日本語の動詞の分類とその根拠であるところの構造的意味を担った *i* 接辞の役割が例証された。特に過去形成接辞 *-ta* と語幹との結合に際しての *-i* の目覚しい活躍は，従来，音便として処理されてきたものであるが，上述のような音韻変化にまとめると，音声の構造的理解を容易ならしめるばかりでなく，日本語教育における動詞記述の形式化に役立つであろう。かくして，規則動詞の二分法の意義と接辞 *-i* の子音幹動詞における役割が，明らかにされた。

参考文献

1) 大野　晋：1964 (動詞活用の起源の研究はどんな価値があるか).『解釈と鑑賞』29巻11号, pp. 39–50.
2) 尾崎　義：1971[9] フィンランド語四週間 (大学書林).
3) 川端善明：1968 (動詞としての活用—連用, 終止形の連合—).『国語国文』38巻4号, pp. 1–25.
4) 川端善明：1976 (用言), 岩波講座日本語, 文法 I (岩波書店), pp. 169–217.
5) 川本茂雄：1976 ことばとこころ (岩波書店).
6) 高津春繁：1970[14] 言語学概論 (有精堂).
7) 国語学会編：1977[26] 国語学辞典 (東京堂出版).
8) 阪倉篤義：1974 改稿日本文法の話 (教育出版株式会社).
9) 塩谷　饒：1959 ドイツ語発音の研究 (三修社).
10) Schubiger, Maria：1970 *Einführung in die Phonetik* (=Slg. Göschen, Bd 1217/1217 a). (Berlin, W. de Gruyter).〔尚邦訳は「音声学入門」(小泉保訳) が大修館より1973に出ており，その訳註は日本語音声に関する例示を含んでいる〕
11) 鈴木孝夫編：1976 日本語の語彙と表現 (大修館). 特に西尾寅弥 (造語法と略語法) 及び長嶋善郎 (複合動詞の構造) の項.
12) 時枝誠記：1950 日本文法口語編 (岩波書店).
13) 日本音声学会編：1976 音声学大辞典 (三修社).
14) 服部四郎：1951 音声学 (岩波書店). 1974 日本語の系統 (岩波書店).
15) 原田信一：1977 (チョムスキーの理論と方法).『言語』Vol. 6, No. 2, pp. 10–17.
16) 馬淵和夫：1971 日本語音韻論 (笠間書院).

(7) この？の解釈については音声学上，音の属性と見るか，独立した音韻的存在とするか見解の相違がある。音声学大辞典 (1976) p. 481 を参照。日本語の促音の表記をこのように声門閉鎖としてよいかどうか，問題があるが，*-i* 音消失による代償的痕跡と考えておくことにする。